Center for Research and Development of Education Systems
CRDES
Nara Women's University
奈良女子大学
教育システム研究開発センター
Newsletter 07

奈良女子大学は何を切り捨ててきたのか　ー教員養成と教養教育をめぐってー

教育システム研究開発センター員　西村　拓生（文学部准教授）

奈良女子大学は再来年、創立100周年を迎えます。本学の前身が奈良女子高等師範学校であったことは周知の通りですが、今の私たちの奈良女子大学は、その伝統と、どのような関係にあるのでしょうか。いささか乱暴に言い切るならば、本学は「女子教育」を堅持するために「師範学校」すなわち教員養成の伝統を切り捨ててきた、と私は考えています。

第二次大戦後の教育改革で新制大学が発足する際に、奈良県においては女高師と県の師範学校（今の奈良教育大学の前身）を統合して奈良学芸大学とするのが当初の文部省の方針でした。しかしこれは、当時、女子の最高学府を自認していた本学にとっては受け入れ難いことだったようです。佐保会を中心に強い反対運動があり、結局、この規模の県としては異例の、女子大と学芸大の２校併置となりました。しかし、この分離の趣旨からして教員養成機能は学芸大に譲ったものと考えられ、それでは女子大には附属校園は不要だろう、ということになります。すると今度は、附属校園の同窓会が反対運動を展開し、最終的に附属も存続ということになりました。ただし、そうなると大学に教育研究に携わるセクションが無いと具合が悪い。そこであらためて文学部に教育学科が作られました。いわば、一度断念したはずの伝統の部分的復活です。

最初に、奈良女は教員養成の伝統を切った、と書きましたが、その後、本学は教員養成そのものをやめたわけではありません。戦後の教員養成には、それを教育大学・教育学部に限定しないという「開放制」の原則がありました。これは、かつての教員養成が学校教育の過度の国家統制と癒着していたことへの反省に基づくものでした。一般大学としての奈良女が、この「開放制」の教育養成において大きな実績を残してきたことは確かです。多くの優秀な女性教員を輩出してきました。しかし、本学がそれをどれだけ自覚的に担ってきたのか、については筆者は疑問をいだいています。８年前に私が本学に赴任したとき、教員養成の体制の手薄さにいささか驚いた記憶があります。教員養成系ではないのだから仕方ないのかと、いったんは納得したものの、その後、日本の教員養成システム全体が「専門性」指向を強める流れの中で、奈良女の手薄な体制ではいよいよ持ちこたえられなくなっている（文科省から教職課程認定を受けるのに綱渡りをしているのです！）のが現状です。

ところで、奈良女において手薄といえば、もう一つが教養教育である、というのが私の認識です（もちろん、充実した授業をしてくださっている教員はおられるのですが、ここはあくまで全体的なシステムの話です）。1992年の大学設置基準「大綱化」を契機に、日本の大学における教養教育は崩壊したと言われています。本学もまた、その例外ではなかった、ということではあります。ようやく近年、あちこちで教養教育再構築の主張を聞くようにはなっていますが、本学では未だそのような問題意識は希薄です。

さて、独立法人化後、本学は生き残りのための厳しい努力を強いられています。そのためには戦力の重点的な配分が不可欠です。発足時の新制奈良女子大学のように、あらためて教員養成を切る選択も検討されるべきでしょう。しかし、私が教育学担当だから言うのではなく、戦略的に、それは今の本学にはあり得ないオプションだと考えます。だとしたら、私たちには何ができるのか。何をしたらよいのか。―教員養成系と同じメニューを取り揃えることは本学には到底無理であると同時に、すべきでもないと考えます。上述のような教員養成の「専門性」指向は、いわばかつての師範教育への逆行です。それが教育問題へのやむにやまれぬ対応として出てきていることは否定しませんが、専門的・技術的力量だけでは今日の教育現場の困難な状況にはとても通用するものではありません。むしろ今こそ教員養成に求められているのが、本当の意味での教養教育である、というのが私の主張です。

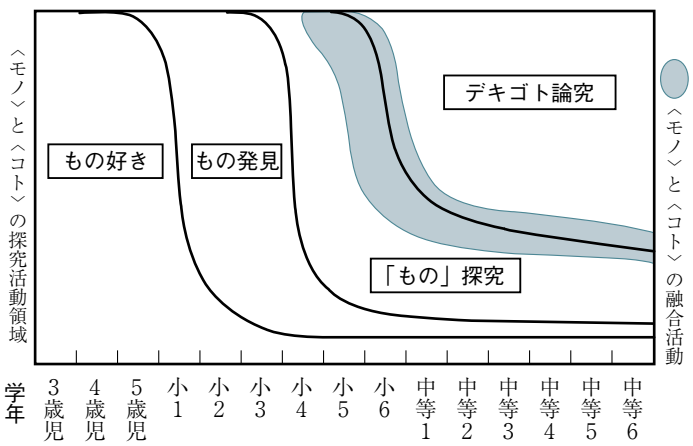
それでは、本当の教養教育とはどういうことか。なぜ、そしてどのように、教員養成と教養教育が結びつくのか。これは場所をあらためてきちんと論じるべき問題です。が、ここで一言だけ述べておくならば、教養とは、巷間言われるような「幅広い知識」などでは決してなく、自らの「正しさ」をも疑うことのできるやわらかな精神のことである、と私は考えています。そのような意味での「やわらかい」教員こそが今、求められていると思います。そのような教員の養成を本学ができれば、それこそ戦前の「師範」と戦後の「大学」を通じた本学の伝統を正しく受け継ぎつつ、日本の社会に貢献できるものになると夢想するのですが、さて…。

附属学校園「研究開発学校」
「幼・小・中等15年間にわたり事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の研究開発」
― 第一年次の取り組みと第二年次の展望 ―

教育システム研究開発センター員　荒木　ユミ（附属中等教育学校）

附属幼稚園・小学校・中等教育学校は、「幼・小・中等15年間にわたり事物認識とその徹底化を通して、独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する教育課程の研究開発」の課題で、平成18. 19. 20年度文部科学省研究開発学校指定を受け、現在、第一年次を終え第二年次の研究に取り組んでいるところです。

本研究のねらいは、子どもたちの、「独創的で『ねばり強い』思考能力」を育むべく、幼稚園３歳児から中等教育６年生までの15年間を通して事物認識とその表現の発達を促すため、〈モノ〉と〈コト〉の質感や構造の探究に向けたコアとなる活動を新たなカリキュラムとして編成することにあります。具体的には、本センターの大学スタッフの支援により構築した事物認識発達仮説(図参照)に基づいた「新領域カリキュラムの編成」、独創性を育む支援となる「学びの協同性育成の取り組み」また、「教育課程開発を支援する取り組み」として指導法の開発、評価法の開発などに取り組んでいます。



（1）新領域カリキュラムの編成

第一年次は、幼稚園では「もの好き」活動の試行として、「色水の不思議」「パズルで遊ぼう」を、小学校では「米作り（２年生)」、「「食」について（５年生)」の取り組みの事物認識発達仮説の中での語り直しを、中等教育学校では中等で現在実施中の総合学習カリキュラムの読み直しを行いました。第一年次の研究を踏まえ、第二年次は本格的なカリキュラム編成に向けての取り組みを試行錯誤しながら進めていますが、ここにおいて、「独創的で『ねばり強い』思考能力」のベースは子どもの「主体的な活動」に存すると考え、幼・小・中等15年間のカリキュラムをつらぬくキーコンセプトを「子どもの自由選択活動」と設定し、これに基づいたかたちでのカリキュラム編成を目指しています。

（2）学びの協同性育成のための取り組み

事物探究活動は、子どもなりの自主的な取り組みを尊重しながらも、学びの転化と深化に向かうには、協同的な活動を必要とします。そこで本研究では、通常の活動に加え、他者との相互作用を種々の機会ややり方で試みる活動を導入します。

幼－小、小－中等、幼－中等の校種間連携活動としての「はてな？の広場」を設置し、生活を異にする他校種異学年の子ども同士が、自他の生活圏で〈モノ〉や〈コト〉を介した学びあい教えあいの交流を行うことにより、別の視点から事物の可能性を再発見し、事物認識を深め、新たな表現を形成することを促します。この活動として、「かがくのひろば」(中等教育学校サイエンス研究会のメンバーが幼稚園児や小学校の生徒に対して、かがくの面白さや不思議さを紹介し、体験に導く活動)「おたずね広場」(中等教育学校２年生の総合学習発表会に小学生が参加し、議論にも加わる取り組み)、また、幼稚園と

小学校は隣接する地の利を生かした交流を機会を捉えて行いました。いずれも子ども達は興味深く活動に取り組み、異校種・異年齢交流ならではのおどろきとあこがれを引き出すことができました。

（3）教育課程開発を支援する取り組み

教育課程開発を支援する取り組みとして、学びの素材や学習材、子どもの自主的で独創的な活動を引き出すための指導法、子どもの事物探究活動について、子どもの短期的－長期的発達の観点と、学びや経験の質の評価を中心とした評価法の開発を研究しています。

昨年度は、大学スタッフの支援のもと、子どもの長期的発達の観点の評価として、「15年間の育ちを見通す」の取り組みを、事物認識発達の評価として、「空気鉄砲」を共通素材とする〈モノ〉に対する関わり方の研究を、中等教育学校では、「学習スタイル・アンケート」を開発、実施しました。「学習スタイル・アンケート」では、附属小学校出身の子どもが他小出身の子どもに比べて、物事に対する取り組みの「ねばり強さ」を有しているとの結果を得、本研究開発の積極的な方向性を見出すことができました。

今年度も昨年度開発した評価法の研究を継続し、素材／学習材開発、指導法開発につなげていきたいと考えています。

奈良女子大学附属小学校　学習研究集会

教育システム研究開発センター員　阪本　一英（附属小学校）

2007年６月８日（金）に附属小学校で「学習研究発表会」を開催した。

主題を「『奈良の学習法』確かな学習力を育てるすじ道」とし、15の公開学習とそれに続く研究協議会、そして４つの分科会を通して、本校教育の研究成果を発表した。

Ａ分科会
「子どもの発想が生きる授業づくり」
廣岡・山上・阪本・太田原

Ａ分科会は、社会科、音楽科、体育科、食育科それぞれの分野から、「子どもの発想が生きる授業づくり」の条件を提案し、参会の先生方のご意見をいただいた。次のような内容が議論の中心になった。

① 教師が教えることを控えて、子どもに任せると、子どもの発想が生きた授業展開になる場合がある。
② ①のように、やりたいことをさせるのには、どのような評価をするか（参観者）
③ 選考経験があって、豊かな発想が生まれる。だから、基礎基本は必要。
④ 子どもの発想は、どういう時に生まれるのか。発送する大元をつかんでおくことが、子どもの発想を生かす上では不可欠である。（参観者）

Ｂ分科会
「学習法を身に付ける第一歩」
椙田・杉澤・水原・大野木

参会のみなさんと「学習法を身に付ける第一歩」について、改めて考えていくことにした。

会場のおたずねからも「子ども達が自分の考えをしっかりもって、表現豊かに話すことができる。」ということへの関心の高さがうかがえた。そして、そのような子ども達を育てるには、毎日の朝の会や日直の仕事、または日記を通じて、子ども達が絶え間なく考え、表現し続けることが大切だと確認された。その中で、言葉の扱い方次第で子どもたちの気づきの深まりが違うということや「書く」ことの大切さが話し合われた。

また、学習法の授業を志しても、納得のいくものが直ちにに実践できるのではなく、様々な試みを積み重ねることで学習法の実践が自分のものになってくるということだった。

C分科会
「子ども中心の授業づくり～悩みと克復～」
小幡・堀本・大野・畔柳

子ども中心の授業を進めていくときの悩みを、学習法を始めたばかりの教師、慣れてきたころの教師の立場に分けて取り上げ、その克服に向けた取り組みを提案した。

前半では、子ども達のつくる授業のめあての立て方、授業の中心となる問いの作り方について話を進めた。子どもの育ちに合わせて、少しずつ伸ばしていくことの大切さと、教材に深く入りこませ、子どもが自らめあてや問いを作り出させるような工夫について話し法、持ち上がりクラスのマンネリ化の対策について、参加された先生方と一緒になって考えていくことができた。

この克服に向けた対策を持続して記録していきたい。

D分科会報告
「子どもが学びをつくる相互学習」
日和佐・谷岡・西條・西下

本分科会は次の四点について提案した。

第一は、子どもがつくる学びの体制について「めあて」「ふり返り」を音楽の取り組みから紹介した。

第二の子どもが進める学びについては、自由研究の発表を取り上げた。「発表・おたずね」は単なる質問やその応対ではなく、人間関係を高めたり、自分の考えを深めたりすることを述べた。

第三は、家庭と学校で支える学びの力について考えた。独自学習の大切さを、理科の新聞や日記などの具体物を提示し、生活の中から事実を見つけ出し、その事実をもとに相互学習が効果的に行われることを紹介した。

第四は、教師のかかわり方について考えた。できることは可能な限り子どもに委ね、できないことは教師が手伝ってあげるようにして、子どもの自主的な活動を支えることの大切さを説明した。

公開学習

1月	なかよし	ともだちの　いろんなところをみつけよう
1星	造　形	じぶんのえをしょうかいしよう
2月	しごと	町たんけん
2星	算　数	1000までの数
3月	理　科	こん虫のくらしと育ち
3星	国　語	本と友だちになろう「三年とうげ」
5星	音　楽	身体で音楽を感じよう
6月	家　庭	おすすめのランチメニュー
2月	食	牛にゅうのよさをみつけよう
3月	音　楽	わらべうた
4月	算　数	何倍になるのかな（思考法）
4星	体　育	ゲームのルールをつくろう（陣とり型ゲーム）
5月	しごと	「『気になる木』の『はっぱ』をふやそう～製品を作る・製品を使う、大研究～」（茶の研究所）
6月	理　科	生活の中の酸・アルカリ
6星	国　語	読書の世界を深めよう「森へ」

奈良女子大学教育システム研究開発センター Newsletter 07
2007年11月発行
奈良女子大学教育システム研究開発センター
〒630-8506　奈良市北魚屋西町
奈良女子大学　H棟505　TEL. 0742−20−3352
Web　http://www.crades.nara-wu.ac.jp/
mail　crades@cc.nara-wu.ac.jp